

### 裏店の音楽で繋がる共同体：下北沢のライブハウスに中心性を定義する

岡部, 陸人 / OKABE, Rikuto

---

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院デザイン工学研究科

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学大学院紀要. デザイン工学研究科編 / Bulletin of graduate studies.  
Art and Technology

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

2

(発行年 / Year)

2023-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030192>

# 裏店の音楽で繋がる共同体 - 下北沢のライブハウスに中心性を定義する -

INSTRUCTIONS FOR PREPARATION OF CAMERA-READY MANUSCRIPTS  
FOR BULLETIN OF GRADUATE ENGINEERING AND DESIGN STUDIES

岡部陸人

Rikuto OKABE

主査 赤松佳珠子

法政大学大学院デザイン工学研究科建築学専攻修士課程

There are many live houses in Shimokitazawa, but there is no hierarchy among live houses, and they are all similar. In the current Shimokitazawa, there is no central place where band members gather. In addition, since Shimokitazawa is mainly a street space, the stores are always facing the street side. Such a situation weakens the connection between stores. I wondered if it would be possible to solve these problems using the urban elements of the front store and the back store.

**Key Words** : Shimokitazawa, Front store, Back store, Live house

## 1. 設計概要

下北沢は、農村として発展し、大正・昭和初期にかけて商業と下宿屋の街として若者の集まりやすい基盤を形成しながら成長して行った。昭和後期には、映画やバンドブームなどを含みながら、若者を中心としたサブカルチャーの聖地となって行った。下北沢が生むカルチャーの連続性や新規性に対して下北沢の景観の変化は、新宿や渋谷のそれと比較して非常にゆったりとしている。下北沢という街は、その持つモラトリアム性に呼応し、ゆっくりと人生を歩くモラトリアムな人たちの居場所を形成している街である。そんな下北沢で発展してきた地下ロックというカルチャーが、流行と共に衰退しつつある。

私は幼い頃からギターという楽器に触れ、バンドというアクティビティに長く触れてきた。ロックというジャンルへの魅力や、なぜ廃れてしまったのかも身にしみて理解できる。しかし、廃れてしまった原因は流行の移り変わりといった文化的なものだけでなく、建築空間としてのライブハウスそのもののデザインが原因なのではないかと考えた。そこで、地下ロック文化が歴史的にゆかりのある下北沢に対し、ライブハウスを設計する。

下北沢にはライブハウスが数多く存在するが、具体的なライブハウス同士のヒエラルキーが存在せず、どのライブハウスも似通ったデザイン、建築規模もさほど変わらない。現状の下北沢には、「ここに行けばバンドマンが集まる」といった中心性のある場所が存在しない。

また、下北沢の街は主にストリート空間が広がっているため、店舗が向いているベクトルは常にストリート側を向いている。このような状態は、店舗同士のつながりを希薄にってしまう。それらの課題に対して、表店・裏店という都市要素を用いて解くことができなかつたかと考えた。

下北沢の街区に対し、ストリートに面しているエリアを表店・そうでない内側のエリアを裏店と定義し、表店の建築群の間からデッキを通して裏店へとアクセスさせる。異なる方向の表店からも同様の動線を通し、それらを裏店空間で結節させる。そこにバンドマンや街に遊びに訪れた人たちのコミュニティ空間を設ける。

## 2. ビルの隙間に続くデッキからのアプローチ



下北沢の街区に対して、表店と裏店として空間的に意味を与えていくと、動的なストリート空間が主であった街に、ビルに囲まれた非常に静的な広場空間が生まれる。そして、この空間にアクセスするためにビルの“すきま”という新しい動線を経由することによって、ストリートではできない空間体験を起こす。

狭いすきまから一気にひらかれる裏店空間へのコントラストを与えるだけでなく、街区の中心へと向かうことによって多様な目的の人たちが集うコミュニティスペースを裏店に展開することができる。

## 3. プレイヤーとオーディエンス、そしてその中間の存在が共存する場



下北沢におけるスズナリの持つ空間的な要素として、表現者と被表現者、そしてその中間にあたる役割を持つ人が同時に同じ建築に存在する状態から、生活の中で触れ合うことの少ないお互いの存在に、物理的・精神的に近づくことができる場所をデザインした。

バンドマンはライブハウスの外ではどんな人たちなのか、どんなコミュニティの中で生きているのか、それらを知ることのできる空間としてこのような状態を作り出すことを提案した。